

氏名(国籍)	一色 誠子(日本)
学位の種類	博士(文学)
学位の番号	乙29
学位授与年月日	2017年3月25日
学位授与の要件	学位規定第20条 2項該当 文学研究科(日本文学専攻)
論文題目	室生犀星晩年の作品群における小説の形成に関する考察
論文審査委員	(主査) 梅光学院大学 教授 中野新治 (副査) 梅光学院大学 教授 浅野洋 (副査) 活水学院 院長 奥野政元

【論文要旨】

本研究論文の目的は、室生犀星(明治二十二年～昭和三十七年)の、俳句、短歌、詩、小説、随筆、童話、戯曲と多岐にわたる文学活動のうち、特に晩年の小説に焦点を当て、晩年の作品群における小説の形成について考察することである。

以下、序章、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ各章の概要を提示する。

【序章 自己の再編——詩と小説の間】

晩年の小説の形成を考えるにあたり、まず、晩年に至っても詩と小説の両方を書き続けた犀星の詩と小説の間について、堀辰雄「室生犀星の小説と詩」、芥川龍之介「出来上がった人——室生犀星氏——」、富岡多恵子「死から小説へ 小説の動機」(『近代日本詩人選 室生犀星』)そして、室生犀星「詩人系小説の時代」を引用しながら、犀星の詩と小説の間について整理し考察した。

小説の執筆が多くなった中期以降、犀星はその時々書き直すほどの添削を加えて詩集を編纂しており、この作業は、詩人であることを確認するための「小説家室生犀星」の〈自己再編〉であった。この再編は、小説でも行われており、それは〈自伝小説〉と、自伝的要素を持つ〈自伝変奏小説〉として、形を変えながら自らを物語に書き綴ることを繰り返していく。この繰り返しは、〈自伝〉・〈自伝変奏〉だけでなく、〈見る〉・〈覗く〉という行為をテーマあるいはキーワードに、繰り返し描いていることにも表れている。さらに、初期から晩年まで通じて、犀星の創作意識と相俟って作品を形成している装幀と造本も、繰り返される自己再編として位置づけた。これらの繰り返される自己再編を視野に入れて、犀星文学の豊饒期である晩年の作品群のうち、小説に焦点をあて小説の形成について考察していくという本論文のねらいを「序」で述べた。

【Ⅰ 自伝変奏】

〈初期自伝もの〉で確立され、〈中期自伝もの〉とほぼ並行して書かれた、〈市井鬼もの〉、

〈甚吉もの〉、〈王朝もの〉など形を変え表出された“自伝的手法”が、晩年には〈偏愛と狂気〉、〈妄執〉、〈もの書く男〉、〈もの書く女〉を伏線としつつ、作者を思わせる主人公に語らせていく〈自伝変奏〉になっていることに着目した。この〈自伝変奏〉が、晩年の作品にどのように表われているのかを、『杏つ子』、『三人の女』、『かげろふの日記遺文』、『蜜のあはれ』、『火の魚』、『告ぐるうた』、『はるあはれ』を取り上げ考察した。

「第一章 仮構すること／生き返すこと——『杏つ子』論」では、自伝の仮構がどのようにされているのかを、物語の時間軸と語りの同化、家族の仮構とその失敗を娘杏子を軸に考察した。そして、仮構の関心は「私」にあり、犀星は、自伝という体を取り家族を含めた自身を仮構し再編することを、『杏つ子』で試みていることを明らかにした。

「第二章 伝世の死に忍ばせたメッセージ——『三人の女』論」では、三人の女性をそれぞれに書き分けながら、最終的には一つにして描くという構図が、『三人の女』以降、「陶古の女人」や『かげろふの日記遺文』にもあることを述べた。また、『三人の女』の一年半（前に書かれた「手と足について」に、『三人の女』の伝世の生き様と重なり合う暗示的な記述（《人間は死ぬまで愛情に飢ゑてゐる動物》であり、《自分にも他人にもすくひになるやうな一人》を探し歩く。）を示し、

犀星の人生観とも言える伝世の生き方を『三人の女』の中に表出したことを明らかにした。

「第三章 女の造形と男の造形——『かげろふの日記遺文』論」では、犀星が登場人物をどのような造形し作品を作り上げていったのかを考察するために、道綱の母の『蜻蛉日記』を典拠とした近代作家による小説のうち、犀星の『かげろふの日記遺文』と、堀辰雄の「かげろふの日記」を対比させて考察した。堀が、原典の『蜻蛉日記』上・中巻に描かれている道綱の母の心の軌跡に添いながら道綱の母一人を描いたのに対し、犀星は、原典に数十行しか出てこず名もない町の小路の女に冴野という名前を与え、物語の中に生かし『かげろふの日記遺文』に仕立てた。そればかりではなく、犀星は、紫苑の上、冴野、時姫を三者三様に描きながらも、物語の最後で紫苑の上と冴野の同化を示唆する場面を用意し、それぞれの造形を消して「女」に一般化していることを明らかにした。そして、紫苑の上をはじめとする女たちの中に分け入りながらも、結局は自らが翻弄されて居場所を定めることができずにいる男（兼家）の姿も、犀星は描こうとしたことを述べた。

「第四章 錯綜するイメージと作家の内部——『蜜のあはれ』論」では、金魚の人格化や全文が会話体であるといった手法に注目しつつ、次の点を考察した。一点は、金魚の少女のなかには、犀星の作品にしばしば登場する〈女ひと〉の一つのタイプが内包されているが、それがいかなる位相を持つかということである。〈女ひと〉の系譜における金魚の少女については、〈生母系〉と〈養母系〉の合わさった『かげろふの日記遺文』の〈町の小路の女系〉であることを明らかにした。もう一点は、全文会話体で書かれているこの作品は、形体は会話（ダイアログ）であるが、本質はをぢさまの独白（モノログ）であること、そして、通常の小説の形体を超えたという意味において、犀星の試みは成功したことを論じた。

「第五章 一つの芸術論として——『火の魚』論」では、一冊の書物の造本と装幀をめぐ

る物語である『火の魚』の作成過程と、犀星の装幀意識を導入部で明らかにし、金魚の魚拓をとることへの執着は、〈私〉の飽くなき探求であり、装幀へのこだわりは、〈私〉の芸術論の展開であることを論じた。また、〈私〉と〈とち子〉の会話が手紙という方法を用いており、〈とち子〉から来た手紙を〈私〉が読むことで物語が進められている点に注目し、手紙という形の〈私〉の独白（モノローグ）として捉えることができることを明らかにした。

「第六章 もの書く女たちと妄執の男たち——『告ぐるうた』論」では、もの書く女として自らのセクシャリティーを表現することで、地方都市の文学青年たちの関心を誘発するものの、やがて男たちに自らのことばと存在を侵犯されることで書くことをやめたもの書く女たちと、彼女たちに絡め取られる男たちについて考察した。犀星は、もの書く女たちに「書く」という役割を与え、書くことで女であることを自覚せざるを得なくなり、それにより葛藤を抱えていることを語らせるが、一人ひとりの心理に深く分け入って描くことはない、また、物語の進行とともに、もの書く女であるゆりえと灰子の書き分けがなくなり、文学を解する「女」と抽象的に描かれていくことを明らかにした。

「第七章 男の〈内部世界〉は何なのか——『はるあはれ』論』では、作者の分身を連想させる、うたを作り、それを紙に書いて市で売る〈男〉が、過去に聖母マリア型の女性として好意を寄せていた文房具店夫人の再来に翻弄される様を読み解いた、物語の最後に出て来る〈三面鏡の中の世界〉は、現実と非現実、現在と過去を往来している〈男〉の過去の幻影という〈男の内部世界〉が作り出したものであることを明らかにした。

【Ⅱ 〈見る〉〈覗く〉ということ】

犀星の初期から晩年までを通じて、テーマあるいはキーワードとして繰り返し描かれている〈見る〉〈覗く〉が、晩年の小説にどのように表出されているのかを考察した。初期小説に見られる〈見る〉という行為が肉体への執着や欲望になっていること、これらがやがて〈眺める〉行為に変わっていくこと、さらに、〈盗み見〉と〈美〉あるいは、〈裸体美〉の関係など、〈見る〉〈覗く〉ということが、晩年の作品中にどのように変質し昇華されていったのかを、『鞆（ボストン・バツグ）』、『汽車で逢った女』、『逮捕の前』、『衢のながれ』、『字をぬすむ男』、『帆の世界』、『末野女』を取り上げ論じた。

「第一章 そこに救いはあるのか——『鞆（ボストン・バツグ）』・『汽車で逢った女』論」では、まず、二作品を連続した作品であることを示した。その上で、主人公である打木田三郎にとって、見るという一瞬の行為で出逢った戸越まさ子との関係が、『鞆（ボストン・バツグ）』から『汽車で逢った女』の過程で、打木田に生きていく場所と救いをもたらしたのかということについて考察した。

「第二章 酒井劉一とさよ子の〈交換の物語〉——『逮捕の前』論」では、山名旅館に逗留する、曰くありげな小説家らしい青年酒井劉一と、山名旅館の女中さよ子に焦点をあて、〈視る〉（この作品の場合〈見る〉ではなく、〈視る〉が内容と合致する）ことがもたらした〈交換〉という作用について論じた。その交換とは、ウラル・ダイヤと腕時計の交換である。突然、宿を立つという酒井にさよ子は、ウラル・ダイヤの入った箱を渡し、酒井はさよ子に、

いつか酒井の部屋で見つけた曰くありげな女持ちの腕時計を渡す。突然の別れに一途な思いを持ってウラル・ダイヤを渡すさよ子とは対照的に、酒井には《動揺もない顔》と《あをざめたつかれ》があるばかりで、物と物との交換のみで心情の交換はそこには成立しない。また、何か事件が起こりそうな雰囲気を作中に出しながらもそのいきつく先までは書かず、互いの様子を探ることで作り出した“事件の気配、を巡る人間模様”に終始していることを分析した。

「第三章 観察者、権九郎——『衢のながれ』をめぐって」では、より多くを見ようとする主人公権九郎と、その裏側に陰のように存在する作者の観察眼が駆使された物語であることを言及し、〈日常〉という設定の中で創り出された物語世界を、作品構成と権九郎の観察眼から考察した。権九郎には、観察に続く徹底した人物や事柄の追究はなく、〈日常〉という設定に権九郎を置き、衢を流れていく出来事や人間模様を、あくまでも「観察」させていると分析した。

「第四章 〈見ること〉〈見られること〉——『字をぬすむ男』論」では、散歩という日常的な場面で、〈私〉＝〈男〉は、見る人であると同時に見られる人であることを提示し、「字をぬすむ」ということと、「見る」という行為を連動させて論じた。『字をぬすむ男』は、〈男の物語〉と〈女の物語〉を書き分けることによって、構成上は男女が一体化されることはない。しかし、〈女〉は、次第に〈男〉にとり込まれていき、〈男〉の観念世界の中で右往左往していることを明らかにした。

「第五章 〈覗く〉という行為の先——『帆の世界』論」では、更沙温泉のホテルの自宅を兼ねている三階の下地窓から、三十メートル下にある浴場を覗いているそのホテルの若旦那である「私」と、「私」をいつも見ている女中満子の動きを分析し、「私」の覗き見という秘密の行為の先にあるのは、覗き見という行為によってもたらされた、裸体美、女体讃美であることを明らかにした。

「第六章 視線の行方——『末野女』論」では、偶然の出会いから出発している二組の男女（男女の関係にあるが夫婦の関係にない〈男〉と〈女〉、うはばみ父娘として興行をする〈八幡〉と〈末野〉）のうち、〈男〉の視線が物語を形成していることに注目し、〈男〉の視線の行方とともに、見る人であった〈男〉が、見ることでうはばみ父娘に囚われ、見られる人であったことを論じた。そして、〈男〉が最後に発した《我にかへりたいものだ》という言葉は、作者が自身に向けて発したことばでもあることに言及した。

【Ⅲ 自己表現としての装幀と造本】

犀星の文学を論じる上で、初期から晩年に至るまで犀星の創作意識と相俟って作品を形成している装幀と造本について論じた。これらは、作品の内容以外のところで繰り広げられてきた、装幀というもう一つの作品を論じるものと位置付け、犀星の自己表現の過程を装幀と造本から読み解いた。

「第一章 装幀と造本をめぐる作家・装幀家・芸術家の思惑——室生犀星とその周辺から」では、岩本柯青、庄司浅水、柳田泉らが創刊した『物語展望』など

を舞台に、装幀や造本に関する議論が盛んになされ、それ以降の装幀と造本に影響を与えていった昭和十年前後を中心に、犀星とその周辺に焦点を当て、作家と装幀家の思惑がどのように働いていたのかを分析した。また、装幀と造本の議論が盛んになる中で、犀星は他の作家たちの装幀と造本のありようを注視しつつ、自らの「装幀哲学」に基づき造本を続け、自らの造本スタイルを造り上げていったことを明らかにした。

「第二章 「作家」室生犀星と「装本家」恩地孝四郎の場合」で

は、雑誌「感情」時代の犀星と恩地の交友にはじまった、犀星著書への恩地の装幀を、互いへの言及もふくめ、両者の装幀・造本意識を分析し比較した。犀星にとって、装幀・造本は、自身の作品を演出して世に送り出すという、書物演出家（ブック・プロデューサー）としての動きであったこと。また、自らを確認するかのよう自身作品のなかに、自伝あるいは自伝変奏の方法で生き返してきたように、本造りも犀星にとって自己確認と自己表現の要素を持つことを明らかにした。

博士論文 一色誠子「室生犀星晩年の作品群における小説の形成に関する考察」

口頭試問報告

主査 中野新治

長年にわたる著者の犀星研究の成果としての博士論文の提出であり、具体的に詳しく研究史の確認がなされていること、「自伝変奏」というテーマに従って論が展開されていることをまず評価したい。また、詩人と小説家という「二足のわらじ」を最後まで脱がなかったことの意味についても一貫して目くぼりが出来ている。また、特に「Ⅲ自己表現としての装幀と造本」における書物の装幀をめぐる詳細な探求は、この論の価値を高めるものであることは間違いない。

しかし、全般にわたって指摘できることとして、各章、各節の結論部の論述が質的にも量的にも物足りず、口頭試問時に於けるやりとりの中での回答が、はじめから折り込まれていれば良かったと思わざるを得ない。細部においても同様のことが指摘できる。例えば、アウシュビッツ強制収容所を扱った「夜と霧」の映画に登場する女性の裸体をめぐる言説に、倫理よりも美の衝迫力を述べる犀星の特質が指摘できることに対しても、言及が不足したものになっていること等、同様の状況が論文の処々に見出せる。犀星が小説の構造を踏み破るような話者を設定するのも、主人公が若い女（娘も含む）をセクシャルな視点で見るのも、犀星が陶器や庭を偏愛するのも、また書物の装幀に必要以上に力を注ぐのも、一貫して＜倫理を越えた人間の真実＞の追求者としての自覚と、その正直な吐露から来ていると思われるし、著者もそのような位置づけで論を展開している以上、全体のまとめ＝著者による犀星の作家としての特質への言及、を論文の最後にしっかりと置くべきであった。

しかし一方で、晩期の作品が小説世界の構成よりも、自己と世界とのつながりをモノローグとして表現することが優先されていることの指摘や、＜盗む＞＜覗く＞などの非人倫的行為にこそ＜書くこと＞の本質を見、それを＜作家の業＞として肯定していることの指摘等は、犀星の特質をよく指摘している。以上、論文の要点と不足点の指摘を行ったが、筆者の意欲がよく伝わる内容をもつ博士論文として、ここに承認するものである。